

72年 —何とか、辛うじて—



北広島医師会
西の里恵仁会病院

戸田博豊

「心の欲する所に従えども矩を踰えず」のよわいをふたとせ重ねることになった。田舎の葬式は盛大だった。50歳台で死んでいた。私は21世紀を見ることは無い、と思っていた。幼稚園。行きたくなかった。毎朝、駄々をこねていた。母は飴玉を持たせるのだが、行きたくなかった。向かいの「たずちゃん」が誘いに来るので仕方なかった。2人で物も言わずに歩いて行った。お絵かきの時間、何もしないでいた。何を描いて良いのか、浮かんでこない。先生が心配そうに寄って来る。思いついてリングを一つ描いた。毎日、毎日、リングを一つ。また、先生方が寄って来る。運動会、お遊戯、じっと立っているだけ。先生方が寄って来る。小学校2年の時、石川富美代先生が産休の代用教員でやって来た。「起立!」。ガチガチの直立不動だったのだろう。「戸田君、力を抜きなさい」とか仰った。次の日から通学できるようになった。母は事あるごとに「石川先生のお陰で」と。毎日、野球で明け暮れていた。夕方は、波止場で釣りをした。山で、目白と鶯を捕った。

中2で大阪に転校した。言葉が通じない。標準語なんて話したことがなかった。できるだけ喋らないようにしよう。友達も欲しいと思わなかった。学校へは行きたくなかった。夏休みが終わったが、学校に行けない。母は「明日は行くんやで、明日は行くんやで」。2～3日は行けなかった。それでも高校で1人、大学で1人と、私の方は関心がなかったが、面倒見の良い友人が居た。最近、分かった。過去世で近しい人たち。大学を卒業しても就職できなかった。世の中に出られなかった。アルバイトで身過ぎをした。この先の人生をどうして生きていったら良いのか? 毎日、うつうつ。医者になろう。医者になった。なれて良かった。なんとかこの71年間を生きてこれた。

登校拒否、引きこもり、自閉症、対人恐怖症、鬱。70を過ぎてから分かった。私はこの地球にやって来て、まだ3回目の人生であるということ。慣れていない。「レンタルなにもしない人」は、今回が2回目の人生。マトモに生きていけるはずがない。この世で活躍している人は20回、30回と経験豊かである。野球の大谷選手は20回目。スポーツ選手にしては人間性も高い。転生回数が多ければ、またこの世で地位の高い人は、高ければ人間性も高いという訳ではない。

市井に埋もれている人の中に、精神病患者とされている人の中にも驚くほど人間性の高い人がいる。外

来で「私に会社員は勤まらないナア」と呟いたら、すかさず看護婦が「そうです。勤まりません」「……」。

この71年間、何とか辛うじて生きてこれた。神様に感謝します。私を支えてくれた人たちに感謝します。ありがとう。

還暦に思う： 病院統合に向けて



小樽市医師会
済生会小樽病院

和田卓郎

1960年、昭和35年生まれのは、この1月に還暦を迎える。昨年、一足早いお祝いの会を職員が盛大に開いてくれた。赤いちゃんちゃんこを着せられ、気恥ずかしいやら、嬉しいやら。まだまだ若いつもりでいたが、肉体、特に目の衰えは確実に押し寄せている。手術ではルーペ、関節鏡モニターの助けがあるので不自由は感じないが、書類、書籍、PCの画面が良く見えないし、疲れる。老眼鏡のCMではないが「字が小さすぎて読めない!」と叫びたくなる。

今年8月、済生会小樽病院は、同一法人の重度心身障がい児施設「西小樽病院みどりの里」と合併統合する。老朽化した西小樽病院の当院敷地内に新築・移転によるもので、済生会小樽病院は現在の258床から120床増の378床になる。異なる文化を持つ2つの施設の統合は、容易ではない。価値観の衝突もあるだろうし、業務改革と意識改革が必須である。しかし、それを乗り越えて、済生会が目指す質の高い医療、福祉、介護を一体提供する体制を作っていきたい。人口減少、少子高齢化が著しい小樽の中で、済生会小樽病院が立地する築港地区は商業施設ウイングベイ小樽、グランドパーク小樽があり、コンビニ、ファミリーレストランの開業も相次ぎ、数少ない発展が期待できる地域である。医療施設を核とした健康街創りにも貢献していきたい。

プライベートでは50を過ぎて本格的に始めたゴルフが上達しない。昨年、やっと100切りを果たしたものの、全くの停滞である。還暦の今年は、ぜひ安定して90台で回りたいものである。

人生100年時代と言われる今、還暦は人生の折り返し地点にすぎない。そう自分に言い聞かせ、日々を楽しく、楽天的に送っていきたい。

